

知覚経験の単称内容

西村正秀*

志向説 (intentionalism) は、現在最も見込みのある知覚理論の一つである。志向説には幾つかの種類がある。本稿の目的は、その中から「バージ的単称志向説 (Burgean singular intentionalism)」とでも呼びうる立場を擁護することである。議論は以下の順で行う。最初に、「知覚経験の単称性 (the singularity of perceptual experience)」と呼ばれる知覚経験の特徴を説明する (第1節)。次に、この特徴を捉えることができる志向説は、何らかの形の「単称志向説」に限られることを論じる (第2節と第3節)。そして最後に、我々はバージ的単称志向説を採用すべきであることを論じる (第4節と第5節)。なお、本稿では感覚モダリティの中から視覚に焦点を合わせる。

1. 知覚経験の単称性

心の哲学において、「知覚経験の本性とは何か」という問題は広く議論されている。この問題について現在最も有力な立場の一つは志向説である⁽¹⁾。志向説とは、知覚経験を信念とは別の命題的態度と見なす立場である。命題的態度とは (命題的) 内容を持つ心的状態であり、内容は世界をある仕方で表象する。したがって、内容は正しさ条件 (correctness conditions) (ここで「正しさ条件」は、真理条件 (truth conditions)、真正さ条件 (veridicality conditions)、正確性条件 (accuracy conditions) などを下位概念とする一般的呼称として理解されたい) を有する。この条件によれば、ある内容が正しいのはそれが表象する通りに世界がある場合であり、かつ、その場合に限られる⁽²⁾。志向説は幾つかの仕方で分類することができるが、本稿で扱う志向説は次の二つの特徴を有している。一つは、知覚経験の現象的性格はその内容によって決定されるという特徴である。もう一つは、真正な知覚とそれとは主観的に区別できない錯覚 (illusion) や幻覚 (hallucination) は共通の表象内容を持つという特徴である⁽³⁾。これら二つの特徴を認めれば、真正な知覚とそれとは区別できない錯覚や幻覚は共通の現象的性格を持つことになる。

これらの特徴を持つ志向説の中から本稿で論じるのは、「単称志向説」と呼ばれる立場である⁽⁴⁾。より具体的には、次の二つのテーゼを擁護する。

(1) 単称志向説は正しい。

(2) 単称志向説の中で、我々が受け容れるべきは「バージ的単称志向説」である。

なぜ単称志向説を論じる必要があるのか。それを見るためには、「知覚経験の単称性」(あるいは「知覚経験の個別性 (particularity) 」) と呼ばれる知覚経験の特徴を説明しなければならない。知覚経験の単称性とは、「真正かつ成功した (successful) 知覚では、知覚経験は主体が知覚しているまさにその個別的对象についてのものである (of the particular object) 」という特徴である (なお、「成功した知覚」とは、主体が対象と適切な仕方で結びついている知覚を意味する)。例えば、ある主体が赤いトマトを真正かつ成功した仕方で知覚しているとしよう。この場合、主体の知覚経験はそのトマトについてのものである。一方、主体が赤いトマトを幻覚しているとしよう。その場合、その主体にはあたかも自分が特定の赤いトマトを見ているように思われるが、実際には知覚対象が存在しないので、主体はそのようなトマトを見ていない。それゆえ、主体の知覚経験はそのトマトについてのものではない。もちろん、知覚経験の単称性は、どの知覚が真正かつ成功した知覚であるのかを現象学的なレベルで保証するものではない。たとえ主体が赤いトマトを見ていると信じているとしても、もしかするとそれは幻覚かもしれない。それゆえ、一人称的観点からは、主体はどの知覚が真正かつ成功したものであるのかを見分けることはできない。むしろ、知覚経験の単称性とは、知覚経験の個別化 (individuation) に関わる概念として理解されるべきである (Burge, 2003a, p. 305, Schellenberg, 2010, p. 20)。この理解によれば、知覚経験の単称性は、「真正かつ成功した知覚経験は個別的な知覚対象によって個別化されている」という事態を表している。

十全な知覚理論は、真正かつ成功した知覚の内容がこのような単称性を持つことを説明できなければならない。単称志向説はこの問題に答えるために考案された立場である。単称志向説とは、「知覚内容は単称内容 (singular content) を含む」と考えるタイプの志向説である。ここで「単称内容」とは、個別的な知覚対象によって個別化された要素を含む内容を指す⁽⁵⁾。より具体的には、that などの指標詞的要素を含んだ内容や知覚対象を直接その構成要素とする内容などが、その候補として挙げられる。単称志向説の利点は、単称志向説を否定する「一般志向説 (general intentionalism)」の難点を見れば明らかである⁽⁶⁾。一般志向説によれば、知覚内容は「赤い対象がある (there is a red object)」のような、単称的要素を含まない存在量化された一般内容として同定される。だが、この立場には、次のような「真正な幻覚からの議論 (the argument from veridical hallucination)」が問題となる⁽⁷⁾。例えば、ある主体が「目の前に赤いトマトがある」と信じているとしよう。一般志向説が正しいとすれば、彼の知覚経験は「目の前に赤いトマトがある」ことを表象している。ここ

で、彼は（本人は気づいていないが）目隠しされており、脳には電極が刺されて知覚経験がその刺激によって生み出されているとしよう。また、彼の前には実際に赤いトマトが置かれているとしよう。この場合、彼の知覚は成功していない（彼とトマトは適切な仕方で結びついていない）ので、我々は直感的には、彼は幻覚を見ていると言いたくなる。しかし、彼の前には実際に赤いトマトが存在するので、彼の知覚内容は真正である。この思考実験は、一般志向説では知覚経験の単称性が十全な仕方で捉えられていないことを示唆している。

真正な幻覚からの議論には十分な説得力があるように思われる。しかし、だからと言って「単称志向説は正しい」と結論するのは早計である。近年、単称志向説に対して、アダム・ポーツは一般志向説を擁護する議論を提出している (Pautz, 2009, 2010)。ポーツによれば、真正な幻覚からの議論は幾つかの仕方で解決可能であり、さらに、単称志向説には独自の問題がある。それゆえ、単称志向説を擁護するためには、ポーツの議論を退けなければならない。また、仮にポーツの議論を退けることができたとしても、単称志向説の擁護者は、「単称内容はどのような本性を持つのか」という問題にも答えなければならない。なぜなら、上述のように、単称内容をどのように説明するのかについては幾つかの候補があり、どの候補に見込みがあるのかは未決の問題だからである。本稿では、次の順序でこれらの問題に答えることを試みる。最初に、第2節と第3節で、ポーツの一般志向説擁護が失敗していることを示す。現時点で一般志向説を擁護する目立った議論はポーツのものなので、私の議論は単称志向説を当面のところ受け容れる理由となるだろう。次に、第4節で、単称志向説の種類を三つ紹介し、最後に、第5節で、その中からバージ的単称志向説が選ばれるべきであることを論じる。

2. ポーツによる一般志向説の擁護

まず、ポーツが一般志向説を擁護していることを確認する。彼は知覚内容を「あらゆるケースにおいて関連する内容は同じ一般内容であり、それは大雑把に言えば、「現に赤くて丸い対象がある (there is a red and round object present)」というものである」と特徴づけている (Pautz, 2009, p. 494)。「知覚経験を持つこと (having a perceptual experience)」と「その内容とある関係に立つこと (standing in some relation to its content)」を同一視しながら、彼は志向説を次のように定義する。

R という以下の関係が存在する。視覚に関するあらゆる経験的特性 E に対して、ユニークな一般内容 c が存在し、 E を持つことと c と関係 R を持つことは同一視される (ある

いは、ユニークな内容タイプ t が存在し、 E を持つこととタイプ t に属する何らかの内容と関係 R を持つことは同一視される)。(Pautz, 2009, p. 493)

R は「感覚的享受関係 (sensorily entertaining relation)」と呼ばれる。「経験的特性 (experiential property)」とは、真正な知覚と真正な知覚から現象学的に区別できない真正ではない知覚とに共通する現象的性格を意味している。この定義でカッコに入れられている部分は、単称志向説の余地を残すために設けられた条件である。このように志向説を一般的な仕方と定義した後、ポーツは単称志向説を批判して一般志向説の擁護を試みている。

ポーツによる一般志向説擁護は、大別して二つの議論より構成される。一つは、真正な幻覚からの議論を退ける議論であり、もう一つは、単称志向説を攻撃する議論である。以下、それぞれの議論を見てみよう。

(1) 真正な幻覚からの議論批判

ポーツは真正な幻覚からの議論の解決法を二つ提出している。第一の解決法は、「中心的内容 (centered content)」に訴えるものである (Pautz, 2010, pp. 299-300, n. 35)⁽⁸⁾。中心的内容とは、心的内容を、それが表象する特性を主体に自己帰属させることによって特徴づける概念である。ポーツによれば、この概念を用いれば、我々は真正な幻覚を避けることができる。

例えば、もしジョンが赤くて丸い対象の幻覚を持っているならば、彼の経験が持つ一般的かつ中心的内容は、赤くて丸い対象の前にあるという特性となるだろう。この内容は、たとえ何らかの別の時間と場所に関して評価された場合には真となるとしても、ジョンの幻覚経験が生じている時間と場所に関して評価された場合には偽となる。(Pautz, 2010, pp. 299-300, n. 35)

ここで注意を一つ述べておこう。中心的内容に訴える解決法は知覚内容の真正さが評価される「文脈」に訴える解決法であるが、文脈に訴える解決法は他にもある。例えば、類似の解決法として、「カプラン主義 (Kaplanianism)」と呼ばれる立場がある (以下の説明は Tye(2009, pp. 83-86) に負う)。この立場はデイヴィッド・カプランの指標詞の理論を知覚内容の説明に応用したものである。カプラン主義によれば、知覚内容は、「私 (I)」「あれ (that)」「ここ (here)」「今 (now)」などの、いわゆる指標詞的要素を含んでいる。周知のように、カプランは指標詞の意味の一つを文脈から内容へ全射する関数と同一視して、

それを指標詞の「意味特性 (character)」と呼んだ (Kaplan, 1989, p. 505)。例えば、「私は東京にいる」という命題を考えてみよう。この場合、「私」が指示する対象は文脈に応じて変化する。もしこの命題の話者がジョンならば「私」はジョンを指示するし、メアリーならばメアリーを指示する。それゆえ、話者がジョンであり、彼が東京にいるならば「私は東京にいる」は真となり、彼が京都にいるならば偽となる。カプラン主義では、このアイデアを使用して知覚経験の単称性が説明される。この立場によれば、個別的对象に関する知覚内容は指示詞的要素「あれ」を含んでおり、この「あれ」はその対象によって個別化される。例えば、主体が赤いリンゴを見ている場合、その知覚内容は「あのリンゴは赤い (that apple is red)」となる。

マイケル・タイは、カプラン主義は幻覚のケースで幾つかの望ましくない含意を持つと指摘する。幻覚においては、知覚対象は存在しないので、指示詞「あれ」は内容を持たないことになる。これは、幻覚は現象的性格を有するが内容を持たないということを意味する。さらに、もし幻覚が内容を持たないならば、正しさ条件も持たないことになる。タイによれば、これらの帰結は我々の直感に反する。第5節で触れるように、私は、タイによる批判は説得力を持たないと考えている。だが議論のために、ここではタイによる批判が正しいとしよう。たとえそう仮定しても、この批判は中心的内容に訴える解決法には当てはまらない (Pautz, 2010, pp. 299-300, n. 35)。なぜなら、この解決法は意味特性の概念を使用しないので、幻覚は真正ではない (間違った) 内容を持つからである。

真正な幻覚による議論の第二の解決法は、知覚内容がその正確性 (accuracy) を決定するという主張を否定する方法である。大雑把に言えば、これは「たとえ知覚内容が真正であっても、知覚経験が不正確であると言うことができれば、それで構わない」というアイデアである。ポーツは、真正な幻覚による議論を次のように診断する。

このようなケース [真正な幻覚のケース] が問題となるのは、一般志向説の提唱者が正確性 e の単純な分析にコミットする場合に限られる。この分析とは、ある経験はその正確性 e 条件をその内容から受け継いでいるというものである。 (Pautz, 2009, p. 499)

ポーツが言う「正確性 e (accuracy $_e$)」とは、具体例によって意味が与えられる正確性のことである (Ibid., p. 488)。ポーツによれば、真正な幻覚からの議論が一般志向説にとって問題と見なされてきたのは、真正な幻覚では、知覚経験の内容が真正であると同時に不正確 e となるからである (Ibid., p. 499)。だが、このような批判は、「知覚経験が正確 e であるか否かは、その経験の内容が正しいか否かで決まる」という考えを前提している。我々は正

確性 e のこのような単純な分析を受け容れる必要はない。知覚内容の正確性 e はよりニュアンスに富んだ仕方では分析されるのであり、一旦そのような分析が手に入れば、真正な幻覚による議論は脅威ではなくなる。では、その「よりニュアンスに富んだ」分析とはどのようなものだろうか。ポーツは知覚内容の正確性 e を次のように定義する。

例えば、彼〔一般志向説の提唱者〕は次のように言うかもしれない。ある経験が正確 e なのは次の条件が満たされる場合であり、かつ、その場合に限られる。すなわち、それが、視覚対象が有しているように見える特性を実際に有しているような非幻覚的な経験であるか、あるいは、その一般内容がその目撃物 (witnesses) の中に主体の直接前にある対象を有する幻覚的经验であるような場合である。(Pautz, 2009, p. 499)

さらに、ポーツはこの定義の下で、見え報告 (looks-reports) を「 o が S に F のように見えるとは、 F であるようなものが存在するという内容を感覚的に享受するように、 o が適切な仕方では S に因果的に作用することである」と分析する (*Ibid.*)⁽⁹⁾。たしかに、このように正確性 e を分析すれば、たとえ知覚内容が真であっても、知覚経験が不正確であることは意味をなすように思われる⁽¹⁰⁾。

(2) 単称志向説批判

次に、ポーツによる単称志向説批判を見てみよう。この批判は「単称志向説は複雑であり、真正な知覚の現象的性格を説明する際に一種のジレンマに陥る」という趣旨の議論である (Pautz, 2010, pp. 299-300, n. 35)。議論のために、単称志向説が正しいと仮定しよう。ポーツによれば、もし単称志向説が正しいならば、知覚内容は、真正な知覚と錯覚の場合には単称内容となり、幻覚の場合にはギャッピー内容 (gappy content) となる。ここで「ギャッピー内容」とは、自由変項を伴った開放文と類比的な内容であり、真正な知覚や錯覚の場合は、変項は個別的対象によって置き換えられるが、幻覚の場合は、変項の部分は対象によって置き換えられず、知覚内容は例化されていない特性のみによって構成されるギャッピー内容となる。単称志向説をこのように理解した場合、ジレンマが生じる。ギャッピー内容は、真正な知覚と錯覚に共通する条件に依存生起 (supervene) するか、依存生起しないかのどちらかである。もし依存生起するならば、真正な知覚と錯覚において主体は単称内容とギャッピー内容の両方を同時に持つことになり、知覚内容の現象的性格は過剰決定 (overdetermine) される。もし依存生起しないならば、単称志向説の擁護者は、なぜギャッピー内容が幻覚の場合にのみ存在するのかを説明しなければならないが、その説明

は困難である。一般志向説にはこのジレンマは生じないので、我々は一般志向説を受け容れるべきだとポーツは結論づける。

3. ポーツの議論の問題点

では、ポーツによる一般志向説擁護を批判的に検討してみよう。最初に、彼の真正な幻覚による議論批判から検討する。ポーツはこの議論を退けるために、二つの解決法を提示していた。残念ながら、これらの解決法には問題がある。

中心的内容に訴える解決法から始めよう。議論のために、この解決法はタイが主張するカプラン主義の難点を回避しているという主張を認めよう。だが、たとえそう認めたとしても、この解決法はタイが提出する別の問題点にさらされている (Tye, 2009, pp. 88-91)。その問題点とは、中心的内容に訴える解決法は一般内容の中に単称的要素を密輸入しているというものである。そもそもポーツが一般内容をどのように特徴づけていたかを振り返ってみよう。彼は一般志向説を擁護する際に、知覚内容が純粋に一般的であることを想定していた。彼によれば、現在議論しているのは、「経験の内容は個別の対象がその中に入ってくる単称内容を含むのか、あるいは、純粋に一般的であるのか」という問題である (Pautz, 200, p. 498)。その上で、彼は一般内容を「現に赤くて丸い対象がある (there is a red and round object present)」という仕方で具体的に説明していた (*Ibid.*, p. 494)。この説明で問題となるのは、「現に (present)」である。なぜなら、これは個別的な場所 (あるいは時間) を指標する単称的要素だと思われるからである。この問題を回避するために、もしかするとポーツは、「現に」という指標詞的要素はフレーゲ的意義であると主張するかもしれない。だが次節で見るように、フレーゲ的意義としての指標詞的内容も単称内容の一種である。それゆえ、「現に」を含む一般内容は、純粋な一般内容ではない。同じ問題は、中心的内容に訴えた解決法にも持ち越される。なぜなら、中心的内容は知覚される様々な特性を主体に帰属させる内容なので、「私」や「現に」といった指標詞的要素を暗黙的な仕方を含んでいるからである。

では、知覚経験の正確性 *e* 条件の複雑な分析に訴える解決法についてはどうか。この解決法は中心的内容による解決法が抱える問題点は回避しているが、別の問題を三点伴っている。第一に、この解決法は真正な幻覚による議論の解決策としては不十分である。真正さ条件と正確性 *e* 条件の分離によってこの議論を解消するためには、正確性 *e* は成功性を含意していなければならない (そうでなければ、今度は「真正かつ正確 *e* だが成功していない幻覚」が一般志向説の脅威となるだろう)。しかし、ポーツは正確性 *e* と成功性は互いに独立だと考えている。彼は、魔女がある主体に様々な幻覚を引き起こす思考実験を引き

合いに出して、偶然主体の目の前の風景と同じ幻覚が引き起こされた場合、その幻覚は正確だが成功していないと主張する (Pautz, 2009, p. 488)。だが、これは実質的には真正な幻覚からの議論と同じ議論である。これでは、たとえ真正さと正確性 e を微妙な仕方で区別したとしても、その区別は真正な幻覚からの議論の解消にとって不十分である。

第二に、正確性 e の複雑な分析からポーツが導き出す見え報告の分析は、極めて曖昧である。彼によれば、見え報告は「 o が S に F のように見えるとは、 F であるようなものが存在するという内容を感覚的に享受するように、 o が適切な仕方で S に因果的に作用することである」という仕方で因果的に分析される。だが、この分析は幻覚における見えについて何も語っていないと思われる。なぜなら、幻覚においては、明らかに o は適切な仕方で S に因果的に作用していないからである。たしかに、ポーツは正確性 e 条件を選言的な仕方で定義し、その選言の一つを「その一般内容がその目撃物の中に主体の直接前にある対象を含んでいる幻覚的经验であるような場合」としていた。ここで「目撃物」が何らかの仕方で因果的に主体に作用するものならば、幻覚における見えも見え報告の分析の中に組み込まれるだろう。しかし、ポーツは「目撃物」とは何であるのか、また幻覚において主体の直接前にある対象が一般内容の目撃物になるとは一体どのような事態を意味しているのかについて、何ら詳しい説明を与えていない。

第三の問題点は、正確性 e の分析の複雑さにある。そもそもポーツが単称志向説よりも一般志向説の方が優れていると見なした理由は、前者は後者よりも複雑であるというものであった (Pautz, 2009, p. 499)。ここで、単称志向説の複雑さとは、前節で説明したジレンマのことである。たしかに、一般志向説ではこのジレンマは生じないので、その意味では一般志向説は単純である。しかし、すぐ後で説明するように、あるタイプの単称志向説にはこのジレンマは生じない。さらに、正確性 e 条件については、ポーツによる分析は単称志向説による分析よりもはるかに複雑である。それゆえ、少なくとも単純さについては、一般志向説は単称志向説と比較して有利な点を持たない。

次に、ポーツによる単称志向説批判を検討することにしよう。ポーツの批判は、単称志向説は知覚経験の現象的性格に関するジレンマに陥るというものであった。しかし、このジレンマは、少なくともあるタイプの単称志向説には生じない。この論点を説明するために、ポーツが指摘するジレンマを再構成してみよう（ただし、煩雑さを避けるために、錯覚のケースは除外する）。

P1 : 知覚経験の現象的性格はその内容によって決定される。

P2 : 知覚内容は真正な知覚の場合は単称的であり、幻覚の場合はギャップを含む。

- P3 : ギャッピー内容は真正な知覚の場合における条件に依存生起するかしらないかのどちらかである。
- P4 : もし依存生起するなら、知覚経験の現象的性格は真正な知覚の場合において過剰決定されることになり、これは問題である。[P1 と P2 による]
- P5 : もし依存生起しないなら、単称志向説の提唱者は、なぜ主体は幻覚の場合だけギャップを含む内容を持つのかを説明しなければならないが、これは困難である。
[P1 と P2 による]
- C : それゆえ、P2 (単称志向説) には問題がある。[P3~P5 による]

残念ながら、P4 は P1 と P2 から演繹されない。P4 を導き出すには、P1 と P2 以外に、「単称内容とギャッピー内容は互いに独立である」という前提が必要である。この前提が追加されれば、たしかに主体はそれぞれが真正な知覚経験の現象的特性を決定する内容を二つ持つので、過剰決定の問題が生じる。だが、我々はこの前提を受け容れる必要はない。例えば、単称内容はギャップを含む一般内容が個別的对象に「適用された (applied)」ものと考えれば、単称内容は (例化された) ギャッピー内容をその構成要素として持つことになる。この理論では、異なる内容のだぶつきは生じず、過剰決定も起こらない⁽¹¹⁾。

以上をまとめれば、ポーツによる一般志向説擁護には十分な説得力がない。むしろ、一般志向説が単称的要素を密輸入している疑いが高い点や、ポーツによる正確性 *e* 条件の分析が無力であったり不必要に複雑であったりする点から判断すれば、単称志向説の方が優れている。一般志向説を擁護する議論は他にもありうるだろうが、現状では単称志向説を受け容れる方が理に適っていると言えるだろう。

4. 単称志向説の三つの種類

次に、単称内容とは何かという問題に移ることにしよう。第一節で触れたように、単称志向説には幾つかの種類がある。我々は、このうちどの単称志向説に見込みがあるのかを検討しなければならない。

単称志向説には大別して、ラッセル的単称志向説とフレーゲ的単称志向説がある⁽¹²⁾。さらに後者には、ギャッピー内容を措定する立場と措定しない立場の二つがある。これらをその提唱者にちなんで、それぞれ「シェレンバーグ的単称志向説 (Schellenbergian singular intentionalism)」、「バージ的単称志向説」と呼ぶことにしよう。本節では、これら三つの単称志向説を説明する。

(1) ラッセルの単称志向説

ラッセルの単称志向説とは、知覚経験の単称内容を「対象を含む (object-involving)」内容と見なす立場である⁽¹³⁾。この立場によれば、単称内容は個別対象とその個別対象が持っている想定される特性や関係から構成される抽象的存在者となる。例えば、ある主体が赤いトマトを見ているとしよう。ラッセルの単称志向説によれば、彼女の知覚経験が持つ内容は、個別的なトマトと赤さの特性によって構成される。この内容は $\langle \text{the tomato}, \text{being red} \rangle$ と表現される。この形式は、主体が複数の対象や複数の特性を持つ対象を見ている場合にも拡張することができる。

このような単称内容が形成されるのは、真正な知覚の場合である。では、幻覚の内容はどうなるのだろうか。幻覚の場合、知覚される対象は存在しない。ラッセルの単称志向説では、幻覚内容はギャッピー内容によって説明される。その場合、ギャッピー内容は真正な知覚経験の単称内容と同じ構造を持つが、対象に当たる部分は空になっており、 $\langle _, P \rangle$ という形で表される（「 $_$ 」はギャップを表し、「 P 」は特性を表す）⁽¹⁴⁾。例えば、ある主体が赤いトマトの幻覚を持っているとしよう。この場合、この幻覚内容は $\langle _, \text{赤さ} \rangle$ と表される。ここで、この「赤さ」の存在論的身分に注意されたい。幻覚の場合、知覚されている対象は存在しないので、ここでの赤さは例化された特性ではなく、例化されていない (uninstantiated) 特性である。

(2) シェレンバーグの単称志向説

フレーゲ的単称志向説とは、知覚経験の単称内容をフレーゲ的意義、すなわち、提示様式 (modes of presentation) と見なす立場である。フレーゲ的単称志向説は、幻覚内容をどのように説明するかに応じて二つに分けることができる。一つは、幻覚内容をギャッピー内容と見なす立場、もう一つは幻覚内容を非ギャッピー内容と見なす立場である。

シェレンバーグの単称志向説とは、近年スザンナ・シェレンバーグが展開している立場であり、幻覚内容をギャッピー内容と見なすフレーゲ的単称志向説である (Schellenberg, 2010)。彼女によれば、知覚内容は「対象と関係づけられた事象的提示様式 (object-related *de re* modes of presentation)」によって構成される。ある提示様式が対象と関係づけられるのは次の三つの条件が満たされる場合であり、かつ、その場合に限られる。

- (1) 主体が同じ対象 o_1 に同じ仕方で知覚的に関係づけられているところの、主観的には互いに区別できない任意の二つの知覚 e_1 と e_1^* の内容は、 $MOP_r(o_1)$ を含む。ここで $MOP_r(o_1)$ とは、対象をインプットとする概念のアウトプットである。

- (2) e_1 から主観的に区別できないが数的には異なる対象 o_2 についての知覚 e_2 は、同じ概念から構成される。しかし、 e_2 におけるインプットは e_1 におけるそれとは異なっている、その結果として生じる e_2 の内容 $MOP_r(o_2)$ は、たとえ e_1 と e_2 が質的には区別できなくても異なっている。それゆえ、対象と関係づけられた事象的提示様式は単射である。すなわち、もし $o_1 \neq o_2$ ならば、 $MOP_r(o_1) \neq MOP_r(o_2)$ である。
- (3) e_1 から主観的に区別できない幻覚は同じ概念から構成されるが、対象が提示されていないので概念は空に留まる。その内容は $MOP_r(_)$ である。(Schellenberg, 2010, p. 37)

$MOP_r(x)$ とは、対象 x に関する事象的提示様式のことであり、フレーゲ的ギャッピー内容である。シェレンバーグによれば、フレーゲ的意義は知覚指示を決定する役割と認知的重要性 (cognitive significance) を説明する役割の両方を持つ。彼女は単称性について、関係の意味と現象学の意味を区別する (Schellenberg, 2010, pp. 20-27)。前者は、真正な知覚では知覚内容は個別的对象によって個別化されるという事態を表すものであり、後者は、現象学的レベルにおいて知覚経験がある個別的对象についてのものであるという事態を表すものである。関係の意味はフレーゲ的意義の一つ目の役割に対応し、現象学の意味は二つ目の役割に対応する。これら二つの意味のうち、より重要なのは関係の意味である。フレーゲ的ギャッピー内容は、幻覚において関係の単称性が欠如していることを、ラッセル主義のように内容に含まれる対象の非存在によってではなく、個別的事象的提示様式における対象の非存在によって説明するのである。

(3) バージ的単称志向説

バージ的単称志向説は、ギャッピー内容を用いないフレーゲ的単称志向説である。この立場は、タイラー・バージが展開している志向説から名前を拝借している。ただし、本稿で私が論じる理論は、バージが提出しているアイデアのうちの幾つかからヒントを得たものであり（その意味で、あくまでもバージ的理論である）、必ずしもバージ自身の立場と完全に符合する保証はない点に留意されたい⁽¹⁵⁾。

バージ的単称志向説において最も特徴的なのは、知覚内容は個別的对象をその中に含まないという点である。ラッセル的であれフレーゲ的であれ、ギャッピー内容は、真正かつ成功した知覚では、個別的对象が知覚内容を部分的に構成していることを認める。バージは、（少なくともラッセル的内容について）このアイデアを否定している。

私はこの論文 [“Belief De Re” (1977)] について、命題の表象的側面には「穴」があり、

その穴は対象と対応する（その対象が命題を完全なものとする）という解釈を聞いたことがある。このような解釈はむしろ愚かだと思う。(Burge, 1977/2007, p. 75)⁽¹⁶⁾

では、バージはギャッピー内容に訴えることなしに、どのようにして単称内容を説明するのだろうか。この問いに答えるためには、バージが知覚内容について導入した一つの区別を見る必要がある (Burge, 2003a, pp. 305-08, 2005, pp. 6-9, 2009, pp. 252-88)⁽¹⁷⁾。彼によると知覚内容には二つの種類がある。第一の種類は「能力＝一般的 (ability-general)」内容である。これは一般内容であるが、存在量化された内容ではなく対象や特性や関係のタイプと指標詞的要素タイプによって構成される⁽¹⁸⁾。「あのトマトは赤い (that tomato is red)」がその一例であり、ここでの「あの」「トマト」「赤さ」はすべて、一般的な提示様式ないしは能力として理解されるフレーゲ的意義である (Burge, 1991, p. 200)。能力＝一般的内容は「自由に反復可能である」点を特徴とする。それは異なる個別的对象に「適用される (applied)」ことによって、異なる単称内容として例化されるのである。第二の種類は知覚内容は単称内容であり、バージはこれを「能力＝個別的 (ability-particular)」内容と呼ぶ。この内容は個別的な対象や特性や関係ならびに指標詞的要素トークンに関するフレーゲ的意義によって構成される。「あのトマトは赤い (that tomato is red)」が能力＝個別的内容として現れた場合、ここに含まれる「あの」「トマト」「赤さ」はすべて、個別的な提示様式ないしは能力として理解されるフレーゲ的意義である。能力＝一般的内容と能力＝個別的内容の違いはその個別化のされ方にある。前者は対象タイプや特性タイプによって個別化されるので、その個別化は知覚が生じる個々の文脈に依存しない⁽¹⁹⁾。それに対して、後者は対象トークンや特性トークンによって個別化され、その個別化は文脈依存的である。

バージ的単称志向説では、知覚経験の単称性は、指示詞的要素タイプを含む一般的な非ギャッピー内容を、知覚対象を含む個別的な文脈に適用することで説明される。上述した二種類の内容の間には、二つの依存関係が成り立つ。まず、能力＝個別的内容は能力＝一般的内容に形而上学的に依存している。すなわち、前者は後者が例化したものである。個別的对象に文脈的に適用されることによって、能力＝一般的内容は単称的な能力＝個別的内容として例化されるのである。また、能力＝個別的内容は（少なくとも部分的には）能力＝一般的内容に説明的に依存している。バージによれば、「自己中心的な指標詞的要素における適用ではない、知覚的で、文脈に束縛された、意味論的に単称的な表象は、非図式的で、属性に関わる、能力＝一般的で、意味論的に一般的な表象に伴われ、それに導かれなければならない」(Burge, 2009, p. 276)。これは要するに、単称内容の知覚指示が成功するためには、一般内容による寄与が必要とされるということであり、フレーゲ的意義が果た

す役割の一つを反映したものである⁽²⁰⁾。

5. バージ的単称志向説の擁護

前節では、三種類の単称志向説を説明した。では、これらの中で我々はどれを受け容れるべきなのだろうか。私は、最も見込みがあるのはバージ的単称志向説だと思う。その理由は、ラッセル的であれフレーゲ的であれ、ギャッピー内容を措定する立場では、知覚経験の正しさ条件を説明するのが困難だからである。ギャッピー内容は開放文と類したものだが、厳密に言えば、開放文自体は真理値を持たない。これは、特に幻覚の場合において深刻な問題となる。なぜなら、通常我々は、幻覚は何らかの意味で「間違っている」あるいは「不正確である」と考えるからである。

シェレンバーグはこの問題を理解しており、その解決を図っている⁽²¹⁾。彼女が提案する解決法は、「不正確性 (inaccuracy)」に二つの意味を区別する方法である。

この反論に答えるためには、内容が不正確となる二つのあり方を区別する必要がある。一つは、内容が正確ではない状況に関する主張を行っているというものである。もう一つは、内容が状況に関する正確な主張を行うのに失敗しているというものである。

(Schellenberg, 2010, p. 40)

シェレンバーグによれば、幻覚のギャッピー内容は二番目の意味で不正確である。この点を示すために、彼女は次の例を出している (*Ibid.*)。ある人が「ペガサスが私の家に住んでいる」と主張しているとしよう。我々はこの命題を不正確 (偽) だと考える。この命題が不正確な理由は、「ペガサス」は指示を持たないので、話者が状況について正確な主張を行うことに失敗しているからである。同様に、幻覚の場合も、主体は自分がある対象と関係づけられていると信じているが、実際はその関係は成立していない。それゆえ、その主体は状況について正確な主張を行うことに失敗している。別の言い方をすれば、彼は「前提に関する失敗 (presupposition failure)」を犯しているのである。

残念ながら、この解決法は十分ではないと思われる。シェレンバーグが指摘しているように、もしこの解決法が正しいならば、その場合、「内容がギャッピーであるという事実は、その内容が必然的に不正確であることを含意する」(*Ibid.*)。だが、この含意は強すぎると思われる。例えば、「ペガサスは翼を持っている」という命題を考えてみよう。この命題の真理値 (正確性) について、たしかに、我々はこの命題が偽である (あるいは真理値を持たない) という直感を持っている。だが、その一方で、我々は (虚構的存在者をどう

扱うかに応じて) この命題が真であるというという直感も有している。後者の直感については、例えば様相述語論理の意味論を使えば、この命題を真とすることが可能となる。しかし、シェレンバーグによる解決法では、その可能性は閉ざされる⁽²²⁾。

バージ的単称志向説では、知覚内容の正しさ条件をこのような強い含意なしに説明することができる⁽²³⁾。この立場によれば、真正であろうとなかろうと、知覚内容は「あの F は G である (that F is G) 」という形をしていた。ここで鍵となるのは、指示詞「あの」にどのようにして意味を与えるかであるが、これは上で触れた様相述語論理の意味論によって可能である⁽²⁴⁾。極めて大雑把に言えば、このアイデアは、あらゆる個体定項について、それらの指示対象によって構成される、すべての可能世界に共通した個体領域を作り、各々の可能世界でそこに存在する個体を選び出すような存在述語 E を導入するというものである。これらの道具立てを使えば、幻覚の非ギャッピー内容は、そこに含まれる指示詞的要素が対象の指示に失敗していることになるので、偽である（あるいは不正確である）と言うことができる。

なお、ここでこのようなバージ的単称志向説は、実質的にはカプラン主義の一種ではないかという意見があるかもしれない。ここでは詳しく検討する紙幅はないが、仮にそうであるとしても、我々はタイが主張したカプラン主義の問題に頭を悩ませる必要はない。というのも、様相述語論理の意味論を用いた同じアプローチをカプラン主義に対してとることが可能だからである。

6. 結論

要約しよう。本稿の議論からは、次の二つのテーゼが示された。

- (1) 単称志向説は正しい。
- (2) 単称志向説の中で、我々が受け容れるべきは「バージ的単称志向説」である。

まず、ポーツの議論の批判的検討が示したように、純粋な一般内容では知覚経験の単称性を十全に扱うことができない。それゆえ、知覚内容は単称内容をその構成要素として含まなければならない。さらに、単称志向説には三つの種類があるが、ギャッピー内容を指定するラッセル的単称志向説とシェレンバーグ的単称志向説では、知覚内容の正しさ条件を十全な仕方で与えることができない。バージ的単称志向説はこの問題を回避しており、それゆえ、最も見込みがある立場である。

註

* 本稿は「平成 22-23 年度科学研究費補助金・若手研究 (B)・課題番号 22720005」に基づく研究成果の一部である。本稿は、科学哲学コロキウム (2011 年 3 月 19 日、キャンパスプラザ京都) ならびに科研費基盤研究 (C)「現代的な知覚研究のための哲学的基礎付けとその体系化」平成 23 年度研究会 (2012 年 1 月 28 日、信州大学) における口頭発表 (タイトルは本稿と同じ) と、The American Philosophical Association (APA), Central Division, 109th annual meeting (2012 年 2 月 17 日、Palmer House Hilton, Chicago) における口頭発表 ‘A Defense of Singular Intentionalism’ (本稿第 1 節～第 3 節に相当) に基づく。これらの発表に際してコメントを下された方々、特に草稿に目を通してコメントを下されたデイヴィッド・ヒルバート教授とコリン・クレイン教授、APA でコメンテーターをして下されたジャネット・レヴィン教授に感謝を申し上げる。

(1) 本稿では、志向説が正しい理論であることを仮定する。知覚経験を説明する理論としては、他にも選言説 (disjunctivism) や感覚与件説などがあるが、本稿ではこれらの立場は検討しない。これらの立場の批判的検討については、Pautz (2010) を見よ。

(2) 志向説に反対する哲学者には、知覚内容は正しさ条件を持たないと主張する者がいる (Brewer, 2006, Travis, 2004)。本稿ではこの主張を検討しない。この主張の検討については、Pautz (2009) を見よ。

(3) 錯覚とは知覚されている対象は存在するがその知覚の仕方が正しくない心的状態であり、幻覚とは知覚の対象自体が存在しないがあたかもある対象を知覚しているかのような心的状態である。

(4) 「単称志向説」と後述の「一般志向説」は、Pautz (2009) から借用した用語である。単称志向説の提唱者には、Burge (1991, 2003a, 2005, 2009)、Tye (2009)、Schellenberg (2010) などがいる。

(5) 単称志向説は、いわゆる「多重内容 (multiple contents) 志向説」と両立可能である点に注意されたい。多重内容志向説とは、知覚内容は異なる本性を持つ複数の内容から構成されるという立場である。本稿では知覚内容を構成する内容の一つが単称内容であれば、その立場を単称志向説と見なす。

(6) 一般志向説の擁護者には、Lewis (1980)、McGinn (1982)、Millar (1991)、Owens (1992)、Davies (1992)、Pautz (2009, 2010) がいる。かつてポーツは一般志向説を多重内容志向説と両立可能と見なしていたが (Pautz, 2007, p. 498)、後に、知覚内容は「純粋に (purely) 一般的」とであると主張している (Pautz, 2009, pp. 498-99)。本稿では、現在のポーツの立場は多重内容志向説と両立しない一般志向説だと見なす。

(7) 例えば、Pautz (2009, p. 499) を見よ。この議論の原型は Grice (1961) に見られる。また、次のような「真正な錯覚」の例もよく使用される (Pautz, 2009, Soteriou, 2000, Tye, 2009)。ある主体の目の前に傾いた鏡があり、それはその主体の横にある白いロウソクを映しているとしよう。また、このロウソクには特殊な照明が当てられ、赤いロウソクのように見えるとしよう。彼はこれらのトリックに気づいていない。さらに、鏡の後ろには実際に赤いロウソクが置いてある。この場合、一般志向説が正しいとすれば、彼の知覚内容「赤いロウソクがある」は真正となってしまう。

(8) ポーツ自身も言及しているが、この概念の原型は Lewis (1994) に見られる。

(9) この見え報告の分析は因果関係を含んでいるが、その因果関係が知覚経験によって表象される必要はない。ジョン・サールは知覚経験の単称性を説明するために、因果関係は知覚経験によって表象されると主張した (Searle, 1983, p. 123)。しかし、多くの論者が指摘するように、因果関係が知覚経験によって表象される必要はない。この指摘については、Burge (1991) と Soteriou (2000) を参照されたい。

(10) ポーツは内容と因果性による見え報告の単純な分析は存在しないかもしれないとも示唆している (Pautz, 2009, p. 499)。恐らくここで彼が意味しているのは、正確性 *e* 条件が内容によって決定されるという前提を放棄しさえすれば、知覚経験の現象的性格がその内容によってどのように構成されるかはわざわざ特定されなくてもよいということだろう。だが、この提案が満足のいくものだとはい底考えられない。単称志向説は、たとえ単純な分析であっても、正確性 *e* 条件と見え報告の分析を提出している。それゆえ、もし一般志向説が単純志向説より優れていると主張するつもりならば、前者も何らかの実質的な分析を提出するべきだろう。

(11) また、コリン・クレインの指摘 (私信による) によれば、通常、過剰決定が問題とされるのは因果関係に関する場合であり、そもそも依存生起について過剰決定の問題が生じるかどうかは疑わしい。

(12) 本稿では、簡便のために、内容を可能世界の集合を使って説明するルイス・スタルネイカー的立場をラッセルの立場の一つとして扱う。

- (13) ラッセルの単称志向説の提唱者には、Bach (2007) や Tye (2009) が挙げられる。
- (14) ラッセル的ギャッピー内容の定式化については、Schellenberg (2010, p. 33) に負う。
- (15) バージによる単称志向説については、Burge (1991, 2003a, 2005, 2009) を参照されたい。スザンナ・シーゲルは、バージもフレーゲ的ギャッピー内容を指定していると解釈している (Siegel, 2011)。一方、シェレンバーグは、その解釈は間違っていると示唆している (Schellenberg, 2010, p. 37, n. 22)。バージ自身は、事象の内容を形式化すれば開放文に類比的なものとなり、その場合、指示詞に形式的に対応するものは自由変項であると述べている (Burge, 1977/2007, p. 76)。だが本稿で説明するように、彼は知覚指示が成功しているか否かに関わらず、指示詞的要素を知覚内容の構成要素と見なしている (Burge, 2003a, p. 306, 2005, pp. 36-37)。このことは、バージにとっても、少なくとも非形式的なレベルでは、知覚内容はギャッピーではないことを意味している。
- (16) この引用箇所は、Schellenberg (2010, p. 37, n. 22) から学んだ。
- (17) この区別は知覚内容に対してだけでなく信念内容にも当てはまるが、本稿では信念内容は無視する。
- (18) 厳密に言えば、バージは知覚経験についての非概念主義を唱えているので、知覚内容を構成する指示詞的要素は概念的存在者ではなく、指標詞概念と類似の機能を果たす非概念的な存在者である。
- (19) 正確に言えば、能力＝一般内容は、主体と主体がその内容を形成してきた環境（バージはこれを「通常環境 (the normal environment)」と呼ぶ）との因果的かつ表象的相互作用によって個別化される。この説明は「反個体主義」と呼ばれるものであり、詳細は Burge (2003b) を参照されたい。
- (20) ただし、ある意味で、バージはフレーゲ的意義が知覚指示を決定するというアイデアの大部分を放棄しているとも言える。彼は、たとえ一般内容のほとんどが不正確であっても、個別の対象に対する知覚指示は成功しうることを認めている (Burge, 2003a, pp. 310-11)。彼によれば、一般内容の正確性について、知覚指示が成功するために必要とされるのは、それが諸特性を整合的で追跡可能な仕方では表象しているということだけである。
- (21) ラッセルの単称志向説を唱えるタイも、この問題に言及している (Tye, 2009, p. 82)。彼は、ギャッピー内容も真理値を持ちうると主張しているが、その詳細については論じていない。
- (22) ギャッピーな命題の真理値に関する別の批判については、Everett (2003) を参照されたい。シェレンバーグもこの論文に言及しているが、この論文に対する直接の反論は試みていない。
- (23) 註(15)で述べたように、バージ自身は、事象の内容を形式化すれば開放文に類するものになると主張していた。彼は、開放文が真理値を持たないことを認めた上で、開放文は論議領域内の個別の対象を自由変項に割り当てることによってモデルを構成するものと解釈することができ、その意味で開放文に関する真理値を問うことができると主張している (Burge, 1977/2007, p. 76)。だが、これは結局のところ、変項を定項にして、開放文を完全な文にすることに他ならない。本稿のポイントは、事象的内容をわざわざ開放文として形式化する必要はないのではないか、というものである。
- (24) 以下の存在述語の説明については、Gamut (1991, pp. 63-66) を参照。

文献

- Bach, K. (2007). 'Searle against the World: How Can Experiences Find Their Objects?', in S. L. Tsohatzidis (Ed.), *John Searle's Philosophy of Language* (pp. 64-78), Cambridge: Cambridge University Press.
- Brewer, B. (2006). 'Perception and Content', *European Journal of Philosophy* 14, 165-81.
- Burge, T. (1977/2007). "'Belief De Re' with Postscript", in T. Burge, *Foundations of Mind* (pp. 44-81), Oxford: Oxford University Press.
- Burge, T. (1991). 'Vision and Intentional Content', in E. LePore & R. van Gulick (Eds.), *John Searle and His Critics* (pp. 195-214), Oxford: Blackwell.
- Burge, T. (2003a). 'Descartes, Bare Concepts, and Anti-Individualism: Reply to Normore', in M. Hahn and B. Ramberg (Eds.), *Reflections and Replies: Essays on the Philosophy of Tyler Burge* (pp. 294-334), Cambridge, MA: The MIT Press.
- Burge, T. (2003b). 'Perceptual Entitlement', *Philosophy and Phenomenological Research* 67, 503-48.
- Burge, T. (2005). 'Disjunctivism and Perceptual Psychology', *Philosophical Topics* 33, 1-78.
- Burge, T. (2009). 'Five Thoughts on De Re States and Attitudes', in J. Almog and P. Leonardi (Eds.), *The Philosophy of David Kaplan* (pp. 246-316), Oxford: Oxford University Press.

- Davies, M. (1992). 'Perceptual Content and Local Supervenience', *Proceedings of the Aristotelian Society* 92, 21-45.
- Everett, A. (2003). 'Empty Names and 'Gappy' Propositions', *Philosophical Studies* 116, 1-36.
- Gamut, L. T. F. (1991). *Logic, Language, and Meaning*, vol. 2: *Intentional Logic and Logical Grammar*, Chicago: The University of Chicago Press.
- Grice, H. P. (1961). 'The Causal Theory of Perception', *Proceedings of the Aristotelian Society* 35, 121-68.
- Kaplan, D. (1989). 'Demonstratives', in J. Almog, J. Perry and H. Wettstein (Eds.), *Themes from Kaplan* (pp. 481-563), Oxford: Oxford University Press.
- Lewis, D. (1980). 'Veridical Hallucination and Prosthetic Vision', *Australasian Journal of Philosophy* 58, 239-49.
- Lewis, D. (1994). 'Reduction of Mind', in S. Guttenplan (Ed.), *A Companion to the Philosophy of Mind* (pp. 412-31), Oxford: Blackwell.
- McGinn, C. (1982). *The Character of Mind*, Oxford: Oxford University Press.
- Millar, A. (1991). *Reasons and Experiences*, Oxford: Oxford University Press.
- Owens, D. (1992). *Causes and Coincidences*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Pautz, A. (2007). 'Intentionalism and Perceptual Presence', *Philosophical Perspectives* 21, 495-541.
- Pautz, A. (2009). 'What Are the Contents of Experiences?', *Philosophical Quarterly* 59, 483-507.
- Pautz, A. (2010). 'Why Explain Visual Experience in Terms of Content?', in B. Nanay (Ed.), *Perceiving the World* (pp. 254-309), Oxford: Oxford University Press.
- Searle, J. R. (1983). *Intentionality: An Essay in the Philosophy of Mind*, Cambridge: Cambridge University Press (1997, 坂本百大監訳『志向性一心の哲学』, 誠信書房).
- Schellenberg, S. (2010). 'The Particularity and Phenomenology of Perceptual Experience', *Philosophical Studies* 149, 19-48.
- Siegel, S. (2011). 'The Content of Perception', in E. Zalta (Ed.), *The Stanford Encyclopedia of Philosophy* <<http://plato.stanford.edu/entries/perception-contents/>>.
- Soteriou, M. (2000). 'The Particularity of Visual Experience', *European Journal of Philosophy* 8, 173-89.
- Travis, C. (2004). 'The Silence of the Senses', *Mind* 113, 57-94.
- Tye, M. (2009). *Consciousness Revisited: Materialism without Phenomenal Concepts*. Cambridge, MA: The MIT Press.

[滋賀大学准教授・哲学]